

127 赴江崎途中即事

江崎に赴く途中即事

在位可知尽是賢

在位 知る可し 尽く是れ賢なり

到辺富國策無辺

國は富む辺りに到りて策は無辺

夾堤遍種千株楮

堤を夾んで遍く種う千株の楮

填海作成万頃田

海を填めて作り成す万頃の田

畝々黄雲水稻熟

畝々の黄雲 水稻 熟す

村々白雪木綿連

村々の白雪と木綿を連る

潜夫今日深慚愧

潜夫 今日の慚愧 深し

欲火舊時濟世篇

舊時 火んと欲す濟世の篇

語釈 江崎地名。赴く訪れる、行く。途中中途。道中。即事その場の事を詠じた詩。在位位に在る、位に就いている間。富國國力の増

進策無し方法、施策。辺り周辺、辺り。堤堤防、土手。遍く隅から隅まで。楮楮紙の材料になる低木。填め埋め立て、充填。万頃

一万頃、古代中国の面積の単位、頃は一頃をいう約三千坪。水稻水耕の稲。熟す成熟、熟れる、穰。村々幾つもの村。白雪白い雪。木綿木

綿の木、綿の木。連る繋がる、連ねる。潜夫潜む男、隠れる人。慚愧恥じる。舊時古い時、昔日。欲す望む、求める。濟世世を救つ、人

民の困難を救う。篇^{つへん}＝札、字を書きつける札、本。畝^{うね}々＝畝また畝、畝が沢山に。黄^{おう}雲＝黄色の雲、稻の色。

釈文 位に就いている間を知るとよい、尽く是賢人である、國は富む辺りに到るも施策は辺りにない、堤を夾んで

隅から隅まで千株の楮を、海を填めて作り出す万頃^{まんけい}の田。畝^{うね}と云う畝^{うね}に黄雲のように水稻^{すいとう}が熟す、村と云う村に白

雪と木綿^{もめん}が連なる、潜^{ひそ}む人今日の慙愧^{ざんき}に深い、昔日を火^{やか}んと思い人民の困難を救う書を、

128
信々行

余一日与井佐十同過藤生村忽聞
信々之声出籬中視之則一女子也
問之佐十々々告以其由々詳于詩

信々行

余は一日井佐十と共に藤生村を過る忽ち聞く
信々の声籬中を出る視ると之れ則ち一女子なり
之に問う佐十佐十告げて以て其の由々詳やかに于に詩にす

采園耶摩溪

采園を采る耶摩の溪

山路曲且折

山路曲り且つ折る

路傍有人家

路傍人家有り

信々犬声聒

信々犬声聒し

視之乃非犬

之れを視る乃ち犬に非ず

一女可二八

一女二八なる可し

予怪暫停節

予怪みて暫く節を停る

信々吠未歇

信々吠て未だ歇まず

同伴吾妻兄
語吾以顛末
彼女子之母
當孕樵林樾
路上見乳犬
其狗悉皆奮
抱之入深山
投諸山中穴
穴深幾十尋
狗也飢而渴
恩愛物自然
禽獸亦無別
犬母臨穴悲
狗也仰母咽

同伴する吾妻の兄
吾に顛末を以て語る
彼の女子の母
孕に當りて樵林の樾
路上に乳犬を見る
其の狗 悉く皆な奮えたつ
之を抱えて深山に入る
諸もろを山中の穴に投ず
穴の深さ幾十尋
狗 也た飢えて渴す
恩愛の物は自然
禽獸も亦た別 無し
犬母 穴に臨みて悲しむ
狗は也た母を仰ぎて咽ぶ

上下互悲鳴

母子息終絶

今日猜々者

母乃怨所結

余也聞此言

憫焉為嬾蹙

余袂易所論

因果仏亦説

今也親目之

聖言其可忽

因歎漁獵徒

物命容易殺

寒林牽黃犬

荒野臂蒼鶻

上下 互に悲しみて鳴く

母子 終に息絶える

今日の猜々者

母 乃ち怨みを結ぶ所なり

余は也た此の言を聞き

憫むは焉ぞ嬾蹙を為す

余の袂に論ずる所易き

因果 仏は亦た説く

今 也た親しく之を目す

聖言 其れ忽にす可し

因て歎く漁獵の徒は

物命 容易に殺し

寒林 黄犬を牽く

荒野に臂の蒼鶻

殺物不為慘
多獲却喜悅
何心為口腹
日暴殄天物
思邈非自死
雖藥不用蛭
無故不殺牛
聖經不可蔑
古人愛及禽
哲所以為哲
今人無慈心
現受畜生罰
寄語漁獵徒
可少為惻怛

物を殺して慘を為さず
多獲して却つて喜悅す
何の心 口腹を為す
日にち暴れて天物を殄つ
思いは邈か自から死するに非らず
藥に蛭を用いずと雖も
無故 牛を殺さず
聖經を蔑む可からず
古人 愛でることは禽に及び
哲所 以て哲を為す
今人 慈心 無し
現に畜生の罰を受ける
寄語する漁獵の徒
少しばかりは惻怛を為す

語釈

信々行ぎんぎんいたんじう 犬の吠える声を聞きながら行く。与とも 共に。過るよほ 尋ねる、行く。藤生村ふじうむら 山陽本線藤生駅 付近。信々ぎんぎん 犬の吠える声、犬
 噛み合う声。籬中さかづち 竹や柴をの組んだ生け垣の中。佐十さじう 井上佐十郎、妻止毛の兄。由々ゆづ 理由、訳。詳しくわ 詳細、細かく、詳しく。詩し 詩歌。于う こ
 こに、これ発字の助字、文首文中に用いる助字、に補語、場所を示すを補語を示す、と接続詞を示す、より、から、比較場所を示す、おいて、か、かな、
 文末にあつて疑問感嘆を示す。困きん 茸、菌。采ると 穫る、採る。耶摩溪やまけい 谷の名。山路さんろ 山の道。路傍ろぼう 道端。人家じんか の住む家。聒かつ 喧しい、愚かな
 さま。視るみ 見る。乃だい なんと、すなわち、そこで。一女いむ 一人の女の子。二八にはち 十六歳、又は十歳。怪みあやし 訝り。暫くしばしば 暫し、少し、少々。節きまつ
 杖、中国南方原産の杖に適した竹。停とど 留める、止める。吠るほえ 犬が鳴く。歇けつ 休憩、憩つ、休む、止める、尽きる、終わる、無い、欠く。同伴どうはん 一
 緒に行く。顛末てんまつ 事の始末、後先、経緯。孕み當りあた 孕む、妊娠する、脹れる。樵林しやうりん 雑木、樵、薪を取る林。樹こかげ 樹、林の木陰。乳犬にゅうけん 乳児をも
 つ母犬。狗いぬ 狗、子犬、犬、番犬。悉くしやく 悉皆、皆、全部。奮ふる 奮つ 興奮。抱えかか 抱き。諸もろ に これを、一氣に。幾十尋いくじゆじゆん 何十尋、尋は高さや長さを
 測る単位周尺で八尺、日本では六尺。飢えう 飢える 飢饉。渴かわ 渴く、乾く。恩愛おんあい 愛と恵み。然りしか 其の通り、当然。禽獸きんじやう 鳥や獸。穴あな 自然の穴。
 臨みのぞ 望み、その場に来て。仰ぎあお 仰ぐ、上を見上げる。咽えづ 嗚咽、呻き鳴く、咽ぶ。怨みうら 恨み、怨む、怨念。憫あわれ 憫、憫憫、可哀相に思ふ。焉えん い
 づくんぞ、なんぞ。頰あ 鼻筋、鼻柱。聲しやく 聲、迫る、狭くなる、ちじまる、地下づく、促す、窮まる。袂たひ 懷、袖。聖ひじり 聖人。因果いんぐわ 原因と結果、
 因縁と果報。因果心報。因よ 原因。歎なげ 歎く 嘆息。泣く。漁獵ぎやうりやく 漁師、魚の獵。徒と 人夫、仲間。容易ようい 簡単。寒林かんりん 寒い林。黃犬かうけん 黄色の犬。牽ひ
 牽引、引つ張る。荒野かうげ 荒れた野。蒼鶺鴒そうしやうりやう 青鳩。臂ひ 腕、かいな、肱、肘。慘さん 惨め。暴は 暴く。殄てん 尽きる 尽くす、悉く滅ぼす、絶える、断つ、死ぬ。
 遑ばく 遙か遠い、隔たりが多い 悶える、憂える。自より から、より。雖いふ ただ、けれども。蛭ひる 沼、などに棲息人や動物の血を吸う、吸血虫。聖經せいけい 尊
 いお経。蔑さげす 蔑視。古人こじん 昔の人。禽きん 鳥類。哲てつ 明らか、物事の道理に明らかなこと、さとい、賢人見識が高く道理を極めた人。慈心じしん 慈悲の心。
 畜生ちくしやう 家畜類。鳥獸ちうぶつ 罰ばつ 罰、罰が当たる。惻そく 木が滴、傷む、悲しむ、哀れむ、不憫に思ふ、愁ろなさま。怛たう 傷む、心を痛める、憂い悲しむ。

釈文 困きのこを采りに耶摩の溪に、山路は曲がり且つ折れる、道端に人家が有り、ぎんぎん 唖々と犬の吠える声が喧しい、之

を見る則ち犬で無く、十才位の女の子であろつ、私は訝り暫く筈を停める、ぎんぎん 唖々と犬が吠えて止まず、同伴した私の妻の兄が、私に事の経緯を語る、彼の女の子の母、妊娠するに当たり雑木林の樾に、路上に子犬を持つ母犬を見る、その狗悉く震えている、之を抱えて深山に入る、諸々を山中の穴に投げ入れる、穴の深さ幾十尋、狗また飢えて涸渴する、愛と恵みは自然に、禽や獣も亦別はない、犬の母穴に臨んで悲しむ、狗はまた母を仰ぎ咽ぶ、上下互いに悲しみて鳴く、母子終に息絶える、今日の^{ぎんぎん} 唖々それ、則ち母は怨みを結ぶ所である、私はまた此の言葉を聞き、憫むはこれ鼻筋に皺しわをよせて、私の袂に易し所論ずる所に易し、因果いんが 応報おうほうは亦説く、今また親しく之を見にする、

聖人の言葉はそれゆるがせにする、因つて難く漁師は嘆く、物の命を容易に殺し、寒い林に黄色の犬を牽ひく、荒野に蒼鶻あおはこの腕を、物を殺して惨めを為さず、多獲して却つて喜び悦す、何の心で口や腹を満たす、日々暴れて天の物を悉く滅ぼす、思ひは逆さかか自ら死ぬのではない、葉に蛭ひるを用いずというけれど、故に理由なく牛を殺さず、尊い御経を蔑さげんではいけない、古人は愛でること禽とりに及び、賢人けんじんの見識けんしきが高く道理を極め以て哲と為す、今の人に慈悲の心が無い、現に畜生の罰を受ける、言葉を与えるぎょうじょう 漁獵りよくの徒に、少しばかりは心を傷めて不憫に思つ。

129 送鬱宮生使于長門

うつみやせいしこ ながと
鬱宮生使于より長門に送る

明朝此去向隣邦

みょうちやう こ かりて隣邦に向う
明朝 此 去りて隣邦に向う

離酒不妨倒一缸

りしゆ さまた いっこう
離酒 妨げず一缸を倒す

州里西風吹繡衫

しゅうり せいふう しゅうしん
州里の西風 繡衫を吹く

数程生景入輿窓

すうてい けい 生じて輿窓に入る
数程 景 生じて輿窓に入る

塑像今存大寧寺

そぞう 今も存す大寧寺
塑像 今も存す大寧寺

(寺有大内公遺像)

(寺に大内公の遺像有り)

鱸魚秋美小松江

ろぎょ しゅうび しょうの江
鱸魚 秋美 小松の江

好將公暇尋勝概

こうしやう しょうがい 勝概を尋ねん
好し將に公暇 勝概を尋ねん

処々留詩筆可扛

しよしよ とど かつ べ
処々に詩を留めて筆を扛ぐ可し

語釈

鬱宮生使 人名。于 ここに、これ。隣の邦 長州、長門。妨げ 妨害、妨げない、邪魔をしない。一缸 一つの瓶、大きな素焼きの

瓶 州里 國境、防州と長州、周防と長門。繡 縫い取り、錦、美しく飾ったさま。衫 衣、一重の短い衣、袖無しの襦袢。数程 数ほど、里程。景

景色。輿 御輿。塑像 粘土で作った像、土像、今は主として彫刻の原型に用いる。大寧寺 大内家の菩提寺。大内公 大内家、毛利以前の周防の守

護職。遺像いざう＝没後に遺された像。鱸魚ろこ＝鱸すずき浅い海の魚で春夏に川を遡上する、幼魚を、せいご、中位を、ふっこ、とよぶ。小松江＝小松港。公暇こうか＝休暇。勝しょう＝景勝。概ねおおよそ＝概略、大方。処々しこしこ＝所々。留りとどまり＝立ち止まり立ち。詩筆しひつ＝詩の筆。詩歌を書く。扛あぐる＝棒を通して担ぎ上げる、担ぐ、担つ。

釈文 明朝此処を去りて隣の邦に向かう、離わかれの酒を妨げず大きな素焼きの瓶を倒す、國境くにさかいの西風が美しく飾つ

た衣服を吹く、数ほど景色が生じて輿こしの窓に入る、大寧寺には今でも粘土で作った像が在る、「寺に大内公の遺像有リ」すずき鱸
が上る秋が美しい小松の江、好し休暇を取つて景勝を概ね尋ねよう、処々詩を留めて筆を担ぐとしよう。

丁巳伏日曝書於書麓中得青門

ちようみ ふくじつ ばくしよしょく

丁巳の伏日於て曝書書麓の中より青門を得たり翁の貧病

ひんびよう

翁貧病詩十律因有感題其後

詩十律 因に感有りて其の後に題す

邵平瓜地主

しょうへい かり じぬし

詩似柴桑翁

詩は柴桑翁に似し

詩酒昔相会

詩酒にて昔 相会い

弄月又吟風

月を弄し又た風に吟ず

一朝君當路

一朝 君の路に當り

夙夜君在公

夙夜に君 公に在り

吾亦索居久

吾れ亦た索居 久し

此遊難復同

此の遊 同に復た難し

君元閑靖質

君 元もと閑靖なる質

澹泊古楊雄

澹泊 古楊の雄

太玄公退後

太玄 公 退ぞきし後

静讀一室中

(君近得唐太玄經)

身入朱門裡

心在青門東

君今無貧病

猶傳貧病工

吾無貧病妙

依舊病与窮

不強与韓似

書則不上公

休怪一鳴絶

天命任窮通

時吟貧病賦

悠然仰蒼穹

静に讀む一室の中

(君近く唐の太玄經を得る)

身は朱門の裡に入り

心は青門の東に在り

君 今 貧病 無し

猶お傳わる貧病の工

吾れに貧病の妙 無し

舊に依つて病と窮

強がらず与に韓に似る

書は則ち公に上らず

休して怪む一鳴を絶するを

天命は窮通に任せて

時に吟ず貧病の賦

悠然と蒼穹を仰ぐ

語釈

丁巳ちやうみ＝弘化四年、一八四七。伏日ふくじつ＝某日。曝書ばくしよ＝書物を日光に晒す。書簾しよれん＝書類や衣服類を入れる竹製の高い箱。青門翁せいもんおう＝山田城太郎、府

生。貧病ひんびやう＝貧血病。十律じゆつりつ＝漢詩の一体、律詩。因よほに＝原因、由来、その上、そこで。感かん＝感じる、感想。邵平しやうへい＝清の詩人、字は子湘、号は青門山人

詩文、音韻學に優れた、邵青門集、古今韻略、の著書がある。瓜の地主うりぢゆう「隠退後瓜を栽培したことによる」似る「似ている」柴桑翁さいそうおう「翁の名」弄あそし「遊

ぶ楽しむ。吟ぎんず＝吟じる、詠う。路に當るあたる＝要路に當る、要職に就く。夙そとに＝早くから、昔から。公に在りあ＝公の要職に有り。索さくす＝探す、搜索、尋

ねる、求める。元もと＝元々、元来。閑かん＝閑静、静かな。靖せい＝静か、清い、小さい、沈める、和らぐ、安んじる。質しつ＝性質氣質。澹泊たんぱく＝心がさっぱりと無欲

なさき、さっぱりと手軽なさき。古いにしへ＝昔。楊雄やうゆう＝前漢の學者、蜀の成都の人、字は子雲、文章家として名高く、始め司馬相如にならい河東、甘泉等の

賦を作つたが、後に易經に真似た太玄經、論語を真似た法言などを著した。退後たいご＝隠退後。太玄公たいげんこう＝易經に真似たもの。一室いつしつ＝一つの部屋。唐たう＝唐の國。

朱門しゆもん＝赤塗りの門、富貴な明の家の門。裡うち＝内。青門せいもん＝邵青門と同じ号の山田城太郎、青門。貧病ひんびやう＝貧血病。貧病ひんびやう＝五竹は貧乏病。工くわう＝巧みに。妙

＝珍しく不思議な、人知を超えたこと。舊きう＝旧、古い。病やまい＝疾病。窮通きゆうつう＝窮まるこちに通じた人。与とも＝共に。韓かん＝韓愈が。怪あじむ＝訝る、不審に思

う。一鳴いちめい＝一鳴き。絶たち＝断つ、絶す。休やすみす＝、終わる、窮す。天命てんめい＝運命。賦ふ＝詩を賦す。悠然ゆうぜん＝ゆったりとしたさま。蒼穹そうきう＝蒼い

通釈

邵平しやうへい青門せいもんは瓜うりを作る地主ぢゆうである、詩は柴桑翁さいそうおうのようである、詩に酒昔互いに会つ、月を愛でまた風に吟じ

る、一朝君いちぢうは要職やうぢやくに就く、朝早くより夜遅くまで君は公おあやけに在り、私はまた住まいを索さがすこと久しい、此の交友とも同

に復た難しい、君は元々閑かな靖かな性質である、心がさっぱりとした無欲な古いにしへの楊雄やうゆう「前漢の學者」隠退後の太玄公たいげんこう

を真似た物を、静かに読む一室の中、「君近く唐の太玄經を得る」身は赤塗りの門の裡、心に在り青門せいもんの東に、「邵平と同じ号

の青門山田府生のこと」君に今貧病なし、猶傳わる貧病の工、私には貧病の妙はない、昔から病と貧窮と、強がらず共に

韓愈^{かんゆ}に似る、書は則ち公に上らず、休して怪しむ一鳴絶するを、運命は窮通^{きゆうつう}に任せて。時に吟じる貧病^{ひんびょう}の賦、ゆつたりとして蒼い穹^{そう}を仰ぐ。

131
枯松行

南子行過藤生村
路有倒松露蟠根
為新可得幾十束
幹蠹根朽碧蘚繁
南子怪之低回久
傍有耕人為我言
惟昔豐公征韓日
募人教書出轅門
応募征夫種此樹
置酒慇懃語弟昆
吾生樹生死樹死
以樹須卜亡与存

枯松行

南子行きて藤生村を過る
路に倒松 蟠根を露して有り
薪に為す可く幾十の束を得る
幹に蠹まれ根は朽ちて碧蘚 繁る
南子 怪しみて之れ低回すること久し
傍に耕人 我に言い為す有り
惟うに昔 豊公 征韓の日
人を募りて出 轅門に書き教む
募に応じた征夫 此の樹を種う
置酒 慇懃と語る弟昆は
吾れ生る樹は生き死せる樹は死す
樹を以て須からく卜う亡と存

樹老參雲人不返
不知于今幾代孫
松樹青々久無恙
近為大風亦被翻
村人懷古不忍伐
年々空長紫苔痕
吾聞此語歎曷已
豐公當日吞乾坤
黷武千里鷄林外
苦民疾人遂少恩
位至閔白今何在
口碑空傳面如猿
貞松千載亦已死
世事至此不堪論

樹老いて雲に参わり人返らず
知らず今において幾代の孫か
松樹青々と久く恙無し
近く大風を為しに亦た翻れり
村人古を懷いて伐るに忍びず
年々空しく長ず紫苔の痕
吾れ此の語を聞きて己に曷ぞ歎く
豐公 當日に乾坤を呑む
武を黷して千里 鷄林の外
民を苦しめ人を疾みて遂に恩に少し
位 至りて閔白 今 何くにか在る
口碑 空し傳る面 猿の如しと
貞松 千載 亦た己に死す
世事 此に至りて論に堪ず

最憐征夫獨何辜

最も憐れむ征夫 獨り何の辜

至今猶有未招魂

今に至るも猶お未だ魂を招ざる有り

語釈

枯松^{こしょう} 枯れた松。 行^い 行く。 南子^{なんし} 南部五竹。 藤生村^{ふじゅうむら} 山陽本線藤生駅の辺り。 過^ある 尋ねる、行く。 倒松^{たうしょう} 薪^{まき}、倒れた松。 根露^{ねろ}し 根が露出して。 蟠^{わだかま}る 蛇局^{とくわ}を巻いたように。 薪^{まき} 薪。 幾十^{いくじゅう} 何十束^{たば}。 束^{そく} 幹^{みき} 木の幹。 蠹^と 木喰い虫が付いている。 朽^くち 朽ちる。 老朽^{らうく} 碧鮮^{へきせん} 青い芍^{しやく} 繁^{しげ}る 繁茂。 低回^{ていかい} 立ち去り難くうろつと廻り歩く。 久し^{ひさ} 久しい、長い間。 傍^{かたわら} 側^{わき} 辺り。 耕^{たや}す人 耕作、百姓、農作業の人。 惟^{これ} 是 怪しみ訝^いり、不審に思い。 昔^{むかし} 昔日^{むかし} 豊公^{ほうこう} 豊臣秀吉。 征韓^{せいがん} 韓国征伐。 韓門^{かんもん} 陣中で車の舵棒を合わせて建て門のようにした。 人募^{ひともの}る 人を募集。 教書^{きょうしょ} 昔武家が用いた命令書。 募^ほに応^{おこ}じ 応募、募集に応じる。 征夫^{せいふ} 出征する兵士や人夫。 樹^きの種^{たね} 松の木の種。 慇懃^{いんきん} 懇ろに、丁寧。 黷武^{とくぶ} 妄りに力を用いる、理由のないに戦をして武徳を汚す。 千里^{せんり} 千里、遠く。 鷄林^{けいりん} 新羅の國の別名、朝鮮の稱。 疾^{しつ} 疾病。 恩^{めぐみ} 恩、恵み、恩恵。 位至^{いし}る 位階が昇る。 関白^{かんぱく} 国政に就いて、天子に奏上する前に、然るべき重臣にその意を通じて申し上げる、関は通じる、白は言う、申す。 在^あり 有り。 口碑^{くひ} 言い伝え、伝説、口承、碑は永久に亡びないの意。 空^{くう}に 空に、暗誦^{あんじゆ} 傳^たる 伝える、伝承。 面^{おもて} 面、顔、顔面。 猿^{まゐ} 猿、猿。 貞松^{ていしょう} 貞淑な松。 千載^{せんざい} 千年、長い年月の意。 己^{みづか}に 既に。 世事^{せいじ} 世間の事柄。 論^{ろん} 議論、論じる。 憐^{あわ}れ 憐憫。 征夫^{せいふ} 出征兵士や人夫。 獨^{ひとり}り 一人。 辜^こ 罪、張りつけ、罪人を殺す、無辜^{むこ}の民。 猶^{なほ} 尚。 招魂^{せうこん} 死者の魂を呼び帰す、たまよばい、死者を慰める。 に、憂い傷むさま。 昆^{あに} 昆は兄のこと。 生^{せい}す 生きる。 死^しす 死ぬ。 樹^きも死^しす 樹木も枯れる。 須^す 求める、用いる、すべからず。 ト 占^{ほく}つ。 与^よ 共に。 樹老^{きろう}い 樹木が老朽して。 参^{まゐ}る 交わり、参る。 雲^{うん}の人 雲上の人、秀吉。 幾代^{いくたい} 何代か。 孫^{そん} 子孫。 青々^{せいせい} 青々と茂る。 久^{ひさ} 久しい、長い間。 恙^{しやう} 無し 無事で有った。 大風^{おおかせ} 大風、嵐。 翻^{ひるがえ}り ひらひらと飛ぶ。 被^ひる 被害、被害。 古^こ 昔。 伐^きる 伐採、伐る。 忍^{しの}びず 忍びない、我慢できない。 年々^{ねんねん} 年を経る。 長^{ちやう}す 成長。 紫苔^{しさい} 紫の苔。 痕^{あと} 跡、痕跡。 歎^{なげ}き 嘆く。 己^{みづか}に 己に。 既^{すで}に 既に。 曷^か なに、なんぞ、いずくんぞ。 豊公^{ほうこう} 秀吉。 當日^{とうじつ} その日。 乾坤^{けんけん} 易の二つの卦の名、天と地、陰と陽、いむとひつじさる、男と女、日と月、のるかそるかの大勝負をする。 吞^のむ 飲む、呑む。

釈文 南部五竹は藤生村を過ぎる、路に倒れた松が蟠^{わたかま}った根を露出している、薪にするべく幾十の束を得る、

幹は蠹^{むし}まれ根は朽ちて青い苔が繁る、私は怪しみて立ち去り難くうろうろと廻り歩くこと久し、傍らに畑を耕す人がいて私に云った、想うに昔豊臣秀吉公が韓国を征伐した時、軍役の人を募集する命令書を出す、募集に応じて出征する人夫が此の樹の種を植えた、別れの酒杯を挙げながら懇ろに弟と昆^{あに}が語る、生きる樹は生き死せる樹は死す、樹を以てすべからく占う存在と滅亡を、樹は老いて雲に参わるほどに成長するも人は返らず、知らず今において幾代の孫か、松の樹青々と久しく無事である、近く大風が来て亦翻り被害に遭う、村人古を懷いて伐るに忍びない、年々空しく長じる紫苔^{しだい}の痕、私は此の言葉を聞いて自分はなんぞと嘆く、豊臣秀吉公当日のるかそるかの大勝負を呑む、妄りに戦いを起こし武徳を汚し千里の新羅^{しんら}の外まで、民を苦しめ人を疾^{にく}みて遂に恩^{めぐみ}に少なし、位人臣を極め閑白に至るも今何処に在る、言い伝えも空しく傳わる顔は猿の如しと、貞淑^{ていしゅく}な松は千年亦既に死す、世間の事柄は此処に至り論ずるに堪えない、最も憐れ征夫独り何の辜^{つみ}、今に至るも猶未だ魂を招いていない。

132
歳暮

歳の暮れ

飄々一劍老風塵

ひょうひょう いっけん ふうじん
飄々たり一劍 風塵に老る

依舊官梅又洩春

きゅう かんばい はる もら
舊に依つて官梅又た春を洩す

自是江湖天地濶

じじ せんち ひら
自らはれ江湖の天地が濶ける

悔吾不早為漁人

くや いさりびと ため はや
吾は悔む漁人の為に早からずと

語釈

歳暮せいは 歳の暮れ。 飄々ひょうひょう 風に吹かれて軽く上がるさま、翻るさま、さまようさま、世間離れして捕まえないさま。 一劍いっけん 一つの

劍 風塵ふうじん 風と塵、世俗の煩わしさ。 老るおい 老ける。 舊きゅう 旧、古い。 舊官きゅうくわん 昔官に仕えたとき。 官梅くわんばい 梅、城中の梅。 洩る春あはるはる 春の日差しが漏れる。

自よより、から。 江湖かうこ 大きな河や湖、人里離れた河や湖の辺、官に仕えず、世を捨てた人のいる所のとえ、てんじて民間、世間、世故に長けた人を言つ、各地をさすらう人、自然を鱸として楽しむ人。 天地てんち 天と地、世界。 濶けるひろ 廣い、心持ちが廣く大きい。 悔るく 悔やむ。 早からずはや 速くない、遅い。 漁人いさりびと 漁師。 為すな 成す、する。

釈文 風に吹かれ軽く上がるように一劍世俗の煩わしさの中に老いる、旧に依つて官梅又春を洩らす、自ずから

是自然を友とする人の世界が濶ける、私は悔やむ漁人の為に早くはないと。

133

雪朝度錦帶橋有感而賦

雪の朝 錦帶橋を度り感有りて賦す
きんたいきょう わた かん ふ

家屢屢空箆与飄

家は竄屢と空し箆と飄と
しばしば むなし はじ ひやう

先生未免折其腰

先生未だ免れず其の腰折るを

公麼斗米数人苦

公麼 斗米 数人が苦しむ
こうば とまい すうにん くる

飛雪回風過錦橋

飛雪の廻風 錦橋を過る
ひせつ かいふう きんきょう よめ

語釈

錦帶橋 山口県岩国市錦川に架かる五龍の橋。度る 渡る。感有り 感じる所有り。賦 詩を賦す、詠む。竄屢 貧しく竄れること屢々。

箆 竹で編んだ飯櫃、米櫃。与 共に。飄 飄、瓢箪で作った酒や水を入れる瓢、風に吹かれ軽く上がるように。公麼 小さい、微か、如何に、

どんなに。斗米 一斗の米。数人 幾人、五、六人。廻風 回る風。錦橋 錦帯橋。過る 行く。

釈文 家は屢々、屢々空しい米櫃と酒瓶が、先生未だに其の腰を折り借るを免れず、どんなにか一斗の米に数あ

る人が苦しむ、雪が飛び風が回る錦帯橋を過ぎる。

134 赴駄床即日

だしょう おもむ そくじつ
駄床に赴く即日

溪路蕭条日欲晡

けいろ しょうじょう ひくれ
溪路 蕭条として日は晡ならんと欲す

寒威益覺徹吾膚

かんい ます はだ とお おほ
寒威 益ます吾が膚を徹すを覚える

後山是雨前山雪

こうざん ぜんみゆ
後山 是れ雨 前山は雪

纔下一山寒暖殊

わずか いちざん くだ こと あたた
纔に一山を下れば寒さ殊に暖かし

語釈

駄床^{だじょう} 山口県岩国市近郊。 赴^{おもむ}く 尋ねる、行く。 即日^{そくじつ} その日。 溪路^{けいろ} 谷の道。 蕭条^{しょうじょう} ひっそりとして物寂しい。 晡^ひを欲^ほす 日暮れに

ならんとする、ゆうがた、申の刻、午後四時頃、夕飯時。 寒威^{かんい} 寒さの威力。 益^{ます} 益々。 覺^{おぼ}える 自覺。 膚^{はだ} 肌、膚。 徹^{とほ}す 通す。 纔^{さい} 僅かに、微かに。

一山^{いちざん} 一つの山。 寒暖^{かんなん} 暑さ寒さ。 殊^{こと}に 特殊、特別。

釈文

溪谷沿いの路はひっそりと物寂しく日暮れになろうとしている、寒さの威力は益々私の膚^{はだ}を徹^{とほ}すを覚える、

後ろの山は雨にして前の山は雪、纔^{わずか}に一山を下れば寒さは殊に暖かし。

135
残菊

残菊

可怜黄華顔色萎

怜む可し黄華の顔色 萎るを

獨教陶令視相悲

獨り陶令 視て相 悲しま教む

秋風吹老東籬色

秋風 吹き老る東籬の色

夜雨敲残三逕枝

夜雨 敲き残す三逕の枝

泛酒桓翁猶似昨

酒 泛て桓翁の猶お昨に似たる

供餐屈子莫過時

餐を供え屈子の時の過ぎる莫れ

縱遭雪壓霜摧去

縱遭 雪を壓し霜を摧いて去る

那改従前隱逸姿

那ぞ改めん従前の隱逸の姿

語釈

残菊 残りの菊。 可怜 聡い、賢い、可憐。 黄華 黄色の花。 顔色 顔の色。 萎る 萎える、萎れる。 陶令 教え導く、法を学ぶ。 視る

見る。 秋風 秋の風。 老る 老ける。 東籬 東の竹や柴を編んで巡らした生け垣。 敲き 叩く。 三逕 三條の小道。 泛る 浮かべる。 桓翁 猶

尚 昨 昨日、昨年。 似る 似ている。 縱遭 自由に遭う。 雪を壓し 雪をて圧さえて。 霜を摧去る 霜を砕き除く。 那 美しい、安らか、なんぞ

いかなぞ、なに、あの。 従前 今までの通り。 隱逸 隠れ逃れる。 屈子 屈原。

釈文 怜む可し黄色の花の顔色がしよく 萎るをなえ、独り法を学び視て互いに悲しませる、秋風が吹き老いる東の生け垣の

人、夜の雨がたた敲き残す三條の小道の枝、酒をうか注かんあつて桓翁なの猶お昨年にに似ている、ご馳走をくつげん供え屈原時の過ぎること無
かれ、自由に遭い雪をあつ壓し霜をくだ推いて去る、どうして改める今まで通りの隠れ逃れる姿を。

136 春日遊新港大師堂觀櫻

春日新港に遊び大師堂の櫻を觀る
しゅんじつしんみなと だいしどう

山模八十八伽藍

山模 八十八 伽藍
さんぼ さんぼ がらん

塑得大師安佛龕

塑得 大師の佛龕に安んず
そとく だいし ぶつがん やす

余亦青松觀月眼

余は亦た青松 觀月を眼に
せいしやう かんげつ

來觀空色遶櫻三

來り觀る空色 櫻三を遶るを
くしよく おうさん めく

語釈

しゅんじつ 春日しんみなと 春の日。新港たいしどう 岩国市。大師堂も 模すも 模写、写す。伽藍がえあん 仏道を修行する所、寺。塑そ 塑像、彫塑。佛龕ぶつがん 仏像を納める厨

子。安あん 安置。觀月かんげつ 月を觀る。空色くしよく 空の色。櫻三おうさん さくらが三本、三方に。遶るめく 巡る。

釈文 山を模す八十八の伽藍、粘土の像を厨子に安置してある、私はまた青い松に月を觀る、来て觀ると櫻が三

方を遶るを。

137

丁巳仲秋訪藤子賞剥談

及夕賦以似之

ていみ ちゅうしゅうとうし たず はくだん しゅう
丁巳の 仲秋 藤子を訪ね剥談を賞す
ゆうへ ふ しめ
夕に及び賦して以て之れを似す

天絶纖雲恰仲秋

てん せんうん た あたか ちゅうしゅう
天 纖雲を絶ち恰も 仲秋

偶然来上故人楼

ぐうぜん くり上る 故人の楼
偶然 来り上る 故人の楼

鳳仙細實垂欄重

ほうせん じつ ほそ らんじゅう た
鳳仙 實に細く欄重に垂れる

扁豆吐花升樹稠

へんとう ひら しじゅ しげ
扁豆の花を吐き升樹 稠る

法螺誰吹夕陽落

ほり 誰が吹く夕陽が落つ
法螺 誰が吹く夕陽が落つ

(時有前山吹法螺者)

(時に前の山法螺吹く者有り)

梵鐘時入晚風流

ぼんしゅう ばんふう
梵鐘 時に晚風に流れて入る

黄昏未去君休怪

くわん いま あやし やめ
黄昏 未だ去らず君 怪むを休よ

要看東山新月浮

み とうざん しんげつ ぶ
看る要す東山に新月 浮ぶを

語釈

丁巳^{ていみ}＝弘化四年一八四七。仲秋^{ちゅうしゅう}＝陰曆の八月、秋の真ん中の月。藤子^{とうし}＝子賞、後藤敬臣。訪ね^{たず}＝訪れ、尋ね。剥談^{はくだん}＝易の六十四卦の一つ、

小人の勢いが盛んで君子の悩むさまにかたどる、むき出しの談話。タタタ方。賦詩を賦す。似す示す、似せる。天空。纖雲細かい雲。絶ち断つ、晴れる。恰も丁度。偶然偶々。思いがけず。故人亡くなった人。楼閣二階家。鳳仙鳳凰の仙人。實に本当に、真に。欄干、手すり。扁豆平たい豆。花を吐き花を開く、花が闌升益々。樹稠樹木が茂る。法螺仏寺又は修験者の吹き鳴らす法螺貝、嘘、大嘘。梵鐘梵鐘、寺の鐘。黄昏黄昏、夕暮れ。怪み訝る。休す休める、止める、窮す。看る見る。東山東の山。新月三月月、陰曆の三、四日頃の月。東の空に上り始めた月、出たての月。

釈文 空は細かい雲もなく恰も陰曆の八月のようである、偶然来て上る故人の楼閣に、鳳凰の仙人實に細く欄干に重なり垂れる、扁豆の花が吐き益々樹が稠る、法螺誰が吹く夕陽が落ちる、「時に前の山法螺吹く者有り」梵鐘時に晩風に流れて入る、黄昏未だ去らず君怪むを休よ、看る要す東山に新月浮ぶを

138 暁行即事

暁行 即事

草底鳴虫声尚忙

草底の鳴虫 声 尚を忙し

獨乘清曉賽醫王

獨り清曉 賽 醫王に乘る

翠娥眉発花無数

翠娥の眉を發く花 無数

一路青々欲染裳

一路 青々たり裳を染んと欲す

語釈

暁あかつき Ⅱ 払暁、夜明け。 即事そくじ Ⅱ その場の事を詠じた詩。 草底そうてい Ⅱ 草の底。 尚なほ Ⅱ 猶。 曉賽きょうさい Ⅱ 暁のお礼参り。 巫王いおう Ⅱ 医者巫女。 翠娥すいが Ⅱ 翠色の三日

月形の美しい眉、美女の美しいさま。 眉び Ⅱ 肩。 発はつ Ⅱ 開く。 発する。 無数むすう Ⅱ 数限りなく。 一路いちろ Ⅱ 一條。 青々せいせい Ⅱ 青々と。 裳しやう Ⅱ 裳裾、下袴。 染そめ Ⅱ 染めたい、染めて欲しい。

釈文 草の底で鳴く虫の声尚忙しい、独り晴れた暁にお礼詣での医王に乘る、翠色の美しい眉を發く花は数限り

ない、一路青々として裳裾もすそを染めたいと思う。

139 富貴不足求

富貴 求めるに足らず

富貴不足求

富貴 足るを求めず

功名何須数

功名 何か数 須ん

朝為南面王

朝に南面の王 為し

夕成北邙土

夕には北邙の土と成る

富貴不足求

富貴 求めるに足らず

功名何須数

功名 何か数 須ん

朝々服赤霞

朝々 赤霞に服す

夜々鍊真土

夜々 真土を鍊る

(真一作黄)

(真に黄一作)

語釈 富貴＝富豪と貴人。足る＝足りる。求めず＝求めない。南面の王＝南に面ての王。夕に＝夕方。夜。北邙＝北邙山。洛陽の北に在り、貴

人の墓が多く有った。功名＝武勲と名誉。何＝幾らか。数＝屢々。須＝須、求める。朝々＝毎朝。服す＝服用、飲む。赤霞＝赤い霞。夜々＝

毎晩。鍊る＝鍊る、丸薬を鍊る。真土＝真の土。

釈文 富豪と貴人求めるに足らず、武勲と名誉幾らか数^{つはし}求める、朝に南面の王と為し、夕べには北^{ほく}邨^{ぼう}の土と成

る、富豪と貴人求めるに足らず、武勲と名誉幾らか数^{つはし}求める、朝々赤霞に服す、夜毎に真^{しん}の土を鍊^ねる。

140 宮地旅館作

みやじりよかん さく
宮地旅館作

新緑帯烟蔭小軒

しんりよく けむり おび しょうけん おお
新緑 烟を帯て小軒を蔭う

客亭蕭瑟断人魂

きやくてい しょうしつ じんこん た
客亭 蕭瑟 人魂を断つ

好山咫尺登難得

この しせき 登るを得ること難し
山を好み咫尺 登るを得ること難し

雨暗阿蘇山下村

あめくら あそ さんが
雨暗く阿蘇 山下の村

語釈

みやじりよかん 宮地旅館〓旅館の名。 作〓作る。 しんりよく 新緑〓若葉。 けむり 烟〓煙る。 かげ 蔭〓木陰。 しょうけん 小軒〓小さな家。 きやくてい 客亭〓旅館。 しょうしつ 蕭瑟〓物寂しいさま。 じんこん 人魂を断

つ〓人魂、たまげる。 この 好む〓好き。 しせき 咫尺〓非常に近い距離短い、簡単なこと。

釈文

しんりよくけむり おび
新緑 烟を帯て小さな家を蔭つ、旅館の物寂しさは人魂を断つ、山を好み非常に近い距離でも登ることは

難しい、雨暗く阿蘇の山下の村。

141
御池

御池

御池現五色水余之遊此霧

御池ぎょち五色水ごしきを現うつす余ゆ之遊きり此霧

深不能見即賦

深あく見るに能ふはず即ふち賦ふす

阿蘇山上五色水

阿蘇あそ 山上さんじょう 五色水ごしき

即是健盤龍池水

是たけいわたつれ即ちすいち健盤龍たけいわたつの池水

神龍潜隱恐人窺

神龍しんりゅう隠かくれ潜ひそみて人おそを恐うかがれて窺うかがう

烟霧故掩五色水

烟けむる霧けむ故ごしきに五色おほの水おほを掩おほう

語釈

御池おんいけ＝池の名、阿蘇山の火口湖。遊ゆう＝訪れる、行く。賦ふ＝詩を賦す。阿蘇山＝熊本県。五色＝五つの色。健盤龍＝健盤龍命、阿蘇神社

の祭神、神武天皇の孫、神龍＝龍神。潜ひそみ＝潜む。人恐おそれ窺うかがう＝人が怖れて覗き見る。烟けむる＝煙。掩おほう＝覆う。

釈文 阿蘇山上の五色の水、是れ則ち健盤龍の池の水、神龍隠れ潜みて人を恐れて窺う、烟る霧故に五色の水

を^お掩^おつ。

142 宿湯谷聞子規有感

湯谷に宿りて子規を聞く感有り

泉石膏肓誤此生

泉石膏肓 此の生を誤る

遠遊自取憶鄉情

遠遊 自取す郷情を憶つを

他日難忘空谷底

他日 忘れ難し空しく谷底

青燈破屋杜鵑声

青燈 破屋に杜鵑の声

語釈

宿＝旅館 湯＝風呂、温泉。子規＝不如歸の漢語的表現杜鵑。感有り＝感じる所有り。泉石＝泉水や石、自然。膏肓＝膏は無なの下の方

育は胸部と腹部の官の薄い膜、膏と肓は治療にくい部分、随つて病気が治る見込みがないこと。誤り＝間違ひ。生＝生涯。自＝より。憶つ＝

思い出す、追憶。郷の情＝故郷の情。他日＝後日。燈＝灯火。破屋＝あばら屋。杜鵑＝不如歸の別名。

釈文 自然は治る見込みの無い病で此の生涯を誤る、遠くに遊び自ずから郷の情を憶うを、他日忘れ難し空しく

谷底を、青燈の破れ屋で杜鵑の声を聞く。

143 觀海臺示諸君

かいだい しよくん
海臺を觀て諸君に示す

此地嘗聞起帝王

此の地 嘗て聞く帝王の起つと
かつ ていおう た

霧州王氣尚蒼々

霧州の王氣 尚お蒼々たり
むしゅう おつき そうそう

愧吾一劍天涯老

吾に愧す一劍 天涯に老るを
かい いっけん てんがい おい

空酔季倫金谷觴

空しく季倫に酔う金谷の觴
くつ きりん こんこく しょう

語釈

觀海の臺^{かんかいだい} 海を觀る高台、高樓、高殿、見晴らし台。諸君^{しよくん} 多くの皆さん。嘗て^{かつ} 以前、前に。帝王^{ていおう} 帝、天子。霧州^{むしゅう} 霧島。王氣^{おうき} 王者

が出る兆^{しほ}しの氣、天子と成るべき人の住む上空に立ち上る氣。蒼々^{そうそう} 空の色の青々としたさま、草木の生い茂っているさま。愧^{はじ}る 恥じる。一劍^{いっけん} 一つ

の劍。天涯^{てんがい} 天の果てと地の果ての意、極めて遠い。老る^{おい} 老ける。季倫^{きりん} 若い兄弟、輩。金^{かね}に 金錢。谷^やる 窮まる、極まる、休す。觴^{さかす} 杯、盃。

釈文

此の地は前に聞く帝王の起つと、霧州の王者がでる兆^{しほ}しの氣が尚蒼々と繁るように盛んである、吾^はは愧^はじ

る一劍天の涯地の果てに老るを、空しく酔う觴^{さかす}に若い輩の金に谷まるを。

144 次渡辺数一見示韻

わたなべすう けんじ いん じ
渡辺数一見示の韻に次す

馬疲裘弊路悠々

つか きゆうへい
馬疲れ裘弊 路 悠々たり

日薩風烟為結秋

にちさつ かぜけむ けつしゅう
日薩 風烟り 結秋を為す

請看男兒今如此

こ み だんじ
請う看よ男兒 今 此の如し

飄零千古帝王州

ひょうれい せんこ ていおう しゅう
飄零 せり千古の帝王の州

語釈

次す 韻次、他人の詩歌と同じ韻字をその順序どつりに用いて作詩すること。渡辺 名前。数 数。一見 一目、一見。韻 詩賦。馬疲れ

馬も疲れて。裘弊 皮衣、獸類の毛皮で作った衣服もよれよれにくたびれた。悠々 ゆつたりと落ち着いたさま、長閑なさま。日薩 日向と薩摩。烟

り 煙。請い 要請、受ける。看る 見る男兒 男の子。飄零 木の葉がひらひらと落ちる、落ちぶれる、零落する。千古 千年の昔。帝王 天子、

帝。州 國

釈文 馬も疲れ衣服も草臥れるも路はゆつたりと長閑に、日向に薩摩の風烟り秋も深まる、請う看よ男兒今此の

ようである、零落した千年の昔の天子の州を。

145 天の盤戸

絶壁夾水立
突兀十里長
浮橋空潭影
白鹽石角霜
傳云開闢古
日神此遁蔵
四海忽闇黒
魍魅常成行
諸神相謀計
奏樂盤戸旁
妙音使神感
開戸微放光

あま いわと
天の盤戸

絶壁 夾みて水を立つ
とつとつ じゅうり
突兀と十里に長し
橋を浮べ空しく影を潭にす
はくえん せつかく しも
白鹽 石角の霜
つた かいびやく いにしえ
傳え云う開闢の古
ひ かみ ここ のが ぞう
日の神 此に遁れ蔵す
しかい たちま やみ
四海 忽ち黒き闇
ちみ ぎょう
魍魅 常に行を成す
しよしん ぼうけい
諸神 相い謀計す
いわと かたわら がく かなで
盤戸の 旁に樂を奏る
みょうおん
妙音 神に感じ使む
かん し
かすか
戸を開き微に光を放つ

夜必乃排戸

夜は必ず乃ち戸を排き
すなわ おしひら

得復見太陽

復た太陽を見るを得たり
また したた ぎよう

銚滴凝為島

銚に滴り凝して島と為す
ほこ したた ぎよう

始生我扶桑

始て我が扶桑 生る
はじめて ふそう うまれ

日月元明白

日月は元 明白なり
にちげつ もと めいはく

鬼神跡渺茫

鬼神之跡 渺茫たり
きしん あと びようぼう

盤戸向処在

盤戸 向う処に在り
いわと ところ あ

古木鬱蒼々

古木 鬱として蒼々たり
こぼく うつ そうそう

語釈

天の盤戸あま いわと 天の岩戸、宮崎県高千穂町。絶壁ぜつへき 切り立った崖。夾みはさ 夾む。突兀とついつ 高く突き出た様、石が峻しく突き出たさま。十里じゆりちゆうの長

十里の長さ、距離。浮橋うきはし 虹の橋。空の潭そら たん 空の淵。鹽しお 塩、白い。石角いしかど 岩角、石の角。傳え云つた 伝えて言う。開闢かいひやく 天地の開け始め、世界の

始まり。古いにしえ 昔。日の神ひのかみ 太陽神、天照大神。遁れ蔵のがぞう 逃れ隠れる。四海しかい 四方の海。世界。忽ちたちま 忽然、突然。闇やみ 暗闇、真つ暗に。魑魅ちみ 山

や沼に棲む化け物、人面獸身で人を迷わせるという。諸神しよしん 諸々の神、八百万の神。相謀あひまわ り 互いに相談して。計るはか 計画。旁かたわら 側、脇、辺り。盤戸

岩戸。楽がく 音楽。奏かなで 奏る 演奏。妙の音たえ ね 美しい音色。感ずかん 感じて。微かすか に 微かに、幽かに、僅かに。乃だい そこで、すなわち。戸を排す 戸を排

除して、戸を開いて。銚に滴り凝し島と為す 矛に滴る水滴が凝固して島と成った。扶桑あづ 日本。日月にちげつ 太陽と月、陰と陽。元だん 元々、元来。明白めいはく 明

らか。鬼神きしん 鬼は陰の神、神は陽の神、死んだ人、およびその靈魂、また、神秘的な靈的な存在。跡あと 痕跡。渺茫びようぼう 廣くて果てしないさま、曾於区微

かなさま。処^{ところ}〓所。在^あり〓有^{あり}り。古木^{こく}〓老木。鬱^{うつ}〓鬱蒼。蒼々^{そうそう}〓空の色の青々としたさま、草木の生い茂っているさま。

語釈 絶壁に水を夾みて立つ、岩が高く突き出て十里に長し、橋を浮かべ空しく影を漂わす、白い塩石角の霜。

傳え云う世界の始まりの古、日の神此処に遁れ蔵れる、四方の海忽然と暗い闇に、山や沼に棲む化け物常に成り行をする。八百万の神互いに相談して計かる、盤戸^{いわた}の傍らで音楽を奏でる、妙音神に感じさせ、戸を開き微かに光を放つ。そして戸を排き、また太陽を見ることができた、鉾^{ほこ}に滴^{したた}る滴^{しずく}が凝固^{ぎょうこ}して島となる、始めて我が日本が生まれる。日月は元々明白である、神秘的な靈的な存在の跡は廣く果てしない、盤戸^{いわた}向かう処に在り、古木は鬱蒼^{うつそう}として蒼々^{あおあお}としている。

146 耶馬溪

やばけい 耶馬溪

先生昨夜吭毫新

先生 さくや 昨夜 こく 吭毫 あらた 新なり

早已化工寫逼真

早已に化 か たくみ 工して寫して真に逼る せま

九州游遍不如意

九州を游遍して如意ならず ゆうへん にょい

唯有此山頗可人

唯だ有り此の山頗る人に可し すこぶ

語釈

耶馬溪やばけい 大分県の山國川の溪谷、景勝地。昨夜さくや 昨晚。吭こく のんど、喉頸。毫こく 少し、僅か。早已はやすで にもう既に。化か す同化。工たくみ 巧み

に、上手に、工。寫うつ し寫す。真逼るしんぱ 真に迫る、迫真。遍あまね く隅から隅。游あそ ぶ訪れる、尋ねる、行く。意い 意志、思い。如ごと く如、同じ、等しい。

唯ただ 只。頗すこぶ る頻りに、屢々、頻繁。可よ し佳い、良い。

釈文 昨夜の先生は喉首少し新しく、早既さくみ に工に化して写し真せま に逼る、九州を遍く思う通りにならず、唯だ有り

此の山頗る人に好し。

147 米良

米良 めら

行訝身溯武陵流

行きて訝いぶかる身は武陵ぶりようの流れに溯さかのぼるを

別有乾坤物悉幽

別に有り乾坤けんこん 物の悉ことごとく幽ゆうなりを

大霧霽時天巳午

大霧だいむ 霽時せいじ 天は巳すでに午ごなり

堅氷結処木猶秋

堅かたく氷を結ぶ処 木き 猶なお秋なり

孤村旁水誰非僕

孤村こそんの旁水 誰か僕しもへに非らず

卑室倚山亦是候

室を卑いやしみ山に倚る亦た是れ候さびるう

斧斤至難樹自死

斧斤ふきん 至難しなん 樹き 自おのずから死す

峰頭処々立如矛

峰頭ほうとうの処々しよしよに立ちて矛ほこの如し

語釈

米良めら 熊本県西米良村、山間僻地。訝いぶり 不審に、怪しみ。溯さかのぼる 溯上。武陵ぶりよう 武陵 流れ 川の流れ。乾坤けんこん 易の二つの卦の名、天と地、

陰と陽、男と女、日と月天地を養子一振りに賭ける、のるかそるかの大勝負をする。悉ことごとく 悉皆、全部。幽ゆう 幽かに。大霧だいむ 大きな霧、深い霧、濃霧。
霽せいる 晴れる、雨や雪が上がる。巳すでに 既に、もう。午ご 午、昼。堅かたく 固く、堅く。猶なほ 尚。孤村こそん 一つの村。旁かたわら 側、脇、辺り。卑いやし 賤しい、卑しい。倚よる 寄りかかる、縋る。候さびる 目上の人の側に仕える、待ち迎える。斧斤ふきん 斧、斧で伐る。難がたし 難しい。樹き 樹木。自おのずから 自分で、自

然³ 峰頭^{ほうとう} 〓 山や峰の頂上。処々^{じょじょ} 〓 所々。矛^{ほこ} 〓 矛、鉞の形。

积文 行きて訝る身は武陵の流れに溯るを、別に有り天と地を賣子の一振りに賭ける物の悉く幽なるを、大

霧が霽る時天は巳に午である、 堅く氷を結ぶ処の木は猶お秋である、孤村の傍らの水誰か僕ではない、室を卑

しみ山に倚りかかる亦た是れ待ち迎える、斧で斤るのは至難で樹は自ずから枯死する、峰の頂の処々に立つ矛のよ
うである。

148 高鍋道中

たかなべどうちゆう
高鍋道中

古松成列鬱相依

こしょう れつ な うつ
古松 列を成し鬱として相依る

陳々狂風捲我衣

きようふう じんじん ころも ま
狂風 陳々と我が衣を捲く

尽日人行碧濤裡

じんじつ へきとう うち
尽日人は行く碧濤の裡

松釵如雨撲頭飛

しょうさい しょうさい
松釵 雨の如く頭を撲て飛ぶ

語釈

たかなべ たかなべ
高鍋＝宮崎県高鍋町。道中＝旅の途中。古松＝老いた松。列を成し＝列んでいる、整列。鬱＝鬱蒼。相依＝互いに寄り合い。狂風＝大風、

嵐、強る風。

ちんちん ちんちん
陳々＝連ねる、並べる。衣＝衣服。捲る＝絡げる、捲る、巻き上げる。尽日＝終日。碧濤＝青い波。波濤裡＝内、中。松釵＝松葉、釵

は簪、松葉は簪に似ているからいう。撲る＝殴る、打撲、打つ。

釈文

うつつ せい
古い松が列を成し鬱蒼として相依る、狂ったように風が連なりと我が衣を捲く、終日人は行く碧い濤の裡、

松葉が雨のように頭を撲て飛ぶ。

149
絶筆

道窮孔子泣麟日
時否文王演易時
自古人生皆若此
卓然獨立是男兒

一系至尊幼冲日
千年社稷存亡秋
平生未遂酬恩志
淚為神州且暮流

右幽囚中作

絶筆

道 窮きゆうして孔子こうし 麟日りんじつに泣く
時ときに否いなや文王ぶんおう 易えきをを演えんべる時
古いにしえより人生じんせい 皆こ 此ことの若ごとし
卓然たくぜんと獨り立つは是れ男兒だんじ

一系いつけいの至尊しそん 幼冲ようちゆうの日
千年せんねんの社稷しゃしよく 存亡そんぼうの秋とき
平生へいせい 未だ遂いまげず 酬恩しゅうおんの志
淚しんしゆうは神州しんしゆうに為なし且かつ暮れに流す

右幽囚ゆうしゆう中の作

為尊王室懷深憂

戎狄不攘死不休

千載堂々社稷在

莫教羶氣入神州

右尊攘社之詩、

嘗結社時賦、句中用

尊攘社三字

王室おうしつに尊そんを為なす深うれく憂おもいを懷おもつ

戎狄じゆうてき 攘はらわす死しして休やまず

千載せんざい 堂々どうどうの社稷しゃしよく 在あり

教なる莫せんきれ羶氣しんしゆう 神州しんしゆうに入るを

右尊攘社そんじようしゃの詩、

嘗かつての社時ふの賦ふを結くちゆうび句くちゆう中

尊攘社そんじようしゃの三字を用うう

生來三十七年秋

悲莫悲於今歲秋

雲物年々漸改色

月光猶似去年秋

生このれて來かた三十七年の秋

悲こんさいみは今歲よの秋 於なり悲なむ莫なれ

雲物うんぶつ 年々ねんねん 漸ようやくく色あを改あらたむ

月光げっこう 猶なお去年きよねんの秋にに似にたり

生來三十七年秋

悲莫悲於今歲秋

愁人一夜千行淚

滴盡滿天明月秋

右二首丁卯中秋幽囚中

有感而賦、

右丁卯八月廿日、

書以示兒需

薊門蕭瑟燕歌愁

羶氣此時滿九州

魯連逝後無清節

唯見當年劉靜修

生れて來た三十七年の秋

悲みは今歳の秋 於り悲む莫れ

愁人 一夜 千行の淚

滴り盡す滿天 明月の秋に

右二首丁卯幽囚中 中秋、

感有りて而て賦す

右丁卯八月廿日、

書を以て兒 需に示す

薊門の蕭瑟に燕歌 愁す

羶氣 此の時 九州に滿つ

魯連の逝後 清節 無し

唯だ見る當年 劉靜 修む

右幽囚中、讀燕歌行所作、

時外夷日驕、海内争學胡風、

競用洋法、蕭牆半化夷矣、

予憂之結尊攘社、欲内滅

羶風而外攘夷也、因得罪、

有感而賦之云、

人亡皇國陸沈秋

宿志蹉跎成水滄

何得後身化萬億

膺戎懲狄護神州

白雲道人南部裕絶筆

時年三十七

右幽囚中燕歌行を讀みて作す所なり、

時に外夷 日に驕り、海内に胡風を學び争う、

洋法を用い競い、蕭牆半ば夷と化す矣な、

予 之を憂い尊攘社を結ぶ、

内滅せんと欲するも羶風而も外攘夷 也り、

因て罪を得る、感有りて之を賦云う、

人亡び 皇國 陸沈の秋

宿志 蹉跎たり水滄に成れり

何を得ん後身 萬億を化し

膺戎 狄を懲しめて神州を救わん

白雲道人 南部 裕の絶筆

時年三十七

語釈

道窮す＝行く道に窮した、行つ道。孔子＝儒教の始祖。麟日＝麟大きな牝の鹿。聖人、英才のたとえ。文王＝文宣王、玄宋皇帝が孔子に贈った尊号。古自＝古くより、から。人生＝人の一生。卓然＝高く優れているさま。獨立＝一人で立つて居る、人の力を借りずに自分の力で身を立てる。一人立ち、一人抜きんでる。男児＝男の子、男子。一系＝一つの血筋、世代の続き。至尊＝この上なく尊い、天子の敬称。幼冲＝まだ幼い、幼く遠い。社稷＝土地の神と五穀の神。古代の天子、転じて國家の意。存亡＝存続と滅亡、生と死。平生＝日常、日頃。遂未だ＝遂げていない、遂げずに居る。酬恩＝恩に酬いる。秋＝時、時期。神州＝神の國、即日本國。暮流＝暮れに流される、暗い方に流れる。幽囚＝囚われの身。王室＝皇室。尊為す＝尊敬する。憂つ＝憂い心配する。懷＝思つ、思い。攘せず＝戎狄を伐たずに、当時の日本を狙う外国。死休せず＝たとえ死すとも休めない、止めない止めない。千載＝千年、千歳。堂堂＝厳めしく立派なさま、雄大なさま、公明正大なさま。糟氣＝生臭い氣。尊攘社＝南部五竹の結社。嘗て＝これまでに、以前。賦＝詩賦、詠む。句中＝句の中に。生來＝生まれ来てこのかた。今歳＝今年。莫れ＝ない、空しい、寂寞。愁＝憂愁、愁つ、憂さま、物寂しいう干行＝千糸。滴り盡す＝涙が滴り尽きて、涙涸れて。滿天＝空一杯に。明月＝明るいう月、十五夜の月。丁卯＝慶応三年、一八六七。中秋＝秋の中頃、陰曆八月十五日、中秋。児需＝五竹の長子需。薊門＝今の北京の近くの地名。蕭瑟＝風の吹くさま。燕歌＝詩を詠つ。魯仲連、戦国時代齊の人、節操の優れた人物で有った。逆後＝逝去の後、没後。清節＝清い節操。當年＝今年。劉＝漢の王室の姓、切る、裂く。静修＝静かに修める。燕歌行＝昔燕の國に世を憂い悲壯な詩を詠じた人達が多く居たことから、憂國の士を言つ。外夷＝外国。驕＝驕慢、驕り高ぶる、誰も眼中に無いような驕つた振る舞い。海内＝海の内、日本中。胡風＝異國風。競い＝競争。洋法＝西洋外国の方法、しきたり。蕭牆＝家の中、垣根、回り。半ば＝半ば、半分。夷と化す＝外国化した。外夷＝外国。攘滅を欲す＝伐ち滅ぼしたい。因て＝原因、従つて。皇國＝天皇の國、日本。陸沈＝地が沈む、人が世の中の姿を隠している、世が乱れ亡びること、頑固で時代の移り変わりを知らないこと。秋＝時、時期。宿志＝前からの志、宿望。蹉跎＝挫折、躓く。水滸＝水の泡。成れり＝なつてしまった。後身＝後の身、死後の身。萬億と化し＝玉碎し萬億の身となつて。鷹戎＝戎を伐ち。狄懲＝狄を懲らしめ。神州＝神の國、日本。救わん＝救つ、護る、守る。白雲道人＝南部五竹の号。

通釈 行く道に窮した孔子麟日に泣く、時に否や文王易を演べる時、古より人の一生は皆このようである、高く勝れて独り立つは是男児。一系のこの上なく尊い天子は未だ幼少の今日、千年の國家が存続が滅亡かの秋、未だ遂げず恩に酬いる志、涙は神州の為に且つ暮れに流れる。右幽囚中の作、王室を尊敬し深く憂いを懷おもう、戎に狄を攘えひすずに死しても止まず、千年の厳めしく立派な國家が在り、生臭い氣を神州に入れてはならない。右尊攘社の詩、前に社賦を結び句中尊攘社の三字を用う、生まれてこのかた三十七年の秋、悲しむは今年の秋より悲しむでない、雲に現れる色や形が年々漸く色を改める、月の光は猶去年の秋に似ている。生まれてこのかた三十七年の秋、悲しむは今年の秋より悲しむでない、愁う人一夜に千條の涙、滴り尽くして満天名月の秋。右二首慶応三年陰曆八月十五日、幽囚中感在りて賦す、右慶応三年陰曆八月廿日、書を、以て長子需もとむに示す、今の北京辺りの物寂しいさまを詩に詠み愁う、この時生臭い氣は九州に満ちる、魯仲連の没後清い節操がない、唯看る当年劉漢の王室が靜かに修める。右幽囚中憂国の士の詩を読み作す所である、時に外国の夷狄日に驕り、国内争つて異国の風を学び、西洋法を用いて競い垣根の半ば異国と化す、私は之を憂い尊攘社を結ぶ、内に生臭い風を滅ぼそうとするがしかも外に夷狄を攘うにある、因つて罪を得る、感じる所ありて之を賦し云う。人亡び皇国の世が乱れ浮沈の秋、年来の志が挫折して水の泡と成った、何をしよう没後の身を玉碎し萬億と化して戎を膺うち 狄を懲えひすしめ神州を救わん。

白雲道人南部裕絶筆